

水田たより 10月号

令和3年10月1日

JA みえきた

桑名地域農業改良普及センター

令和3年産水稻のふりかえり

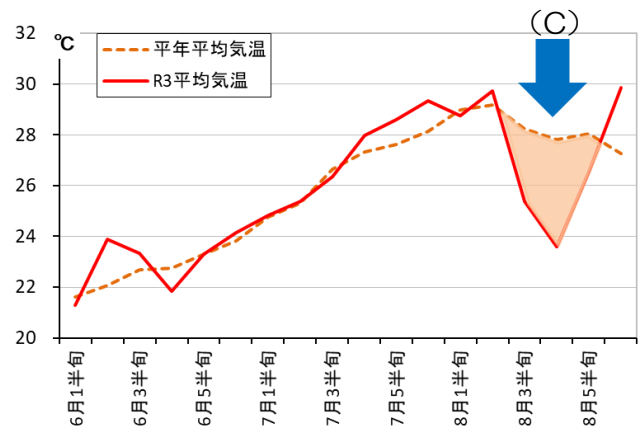
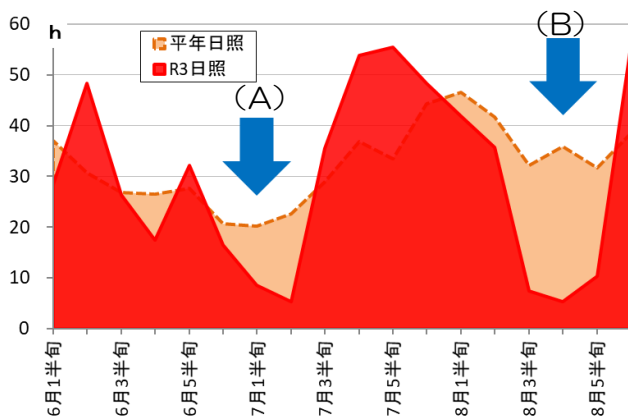
■ 令和3年産水稻作柄概況について

三重県における8月15日現在の作柄は、やや不良と見込まれています。

作柄が悪くなった原因として、①日照不足、②カメムシ類による被害 が考えられます。

① 本年の水稻生育期の気象について

(A) 6月下旬から7月中旬までの幼穂形成期～出穂期の日照不足（平年比48%、6月6半旬～7月2半旬）により1穂もみ数の減少ともみ殻の生長の阻害が考えられること、(B) 8月初旬から下旬の登熟期の日照不足（同42%、8月2半旬～5半旬）や (C) 低温（同93%、8月2半旬～5半旬）により登熟が不十分であったことから、作柄が悪くなったと考えられます。



また、8月の長雨の影響で穂いもちが発生する圃場も多く、不稔や粒の肥大抑制が起こったことも作柄に影響したと考えられます。

② カメムシ類による被害について

本年において、令和3年度病害虫発生予報第5号（三重県病害虫防除所）ではカメムシ類の発生量は「やや多い」と報告されており、特に木曾岬町や桑名市長島町など管内の一部でもカメムシ類による不稔や斑点米が多く見受けられました。

収量の減少は収入の減少に直結します。来年は下記を参考にカメムシ類の防除をおこなってください（防除の詳細は「三重県 防除所」でご検索ください）。

薬剤での防除

穂揃期、乳熟期の2回防除を基本とし、発生状況で防除回数や時期を調整する

雑草の管理

畦畔からの害虫の侵入を防ぐため、出穂10日前までに畦畔除草を終わらせる

地域での防除

地域が一体となって防除をおこなうことにより、カメムシ類のエサ場をなくす

特に、カメムシは移動性が高く、無防除ほ場や防除効果の切れたほ場を逃げ場（エサ場）として増え続け、防除した圃場の薬効が切れたらまた戻ってきて吸汁します。効果的な防除とするために、地域が一体となって防除を徹底することが大切です。

麦の雑草対策

近年多発している雑草の防除は土壌処理剤だけでは困難で、生育期の茎葉処理剤の散布や耕種的防除との組み合わせが必要となります。今回は主な難防除雑草の発生生態と防除方法を紹介します。

■発生生態

イタリアンライグラス（ネズミムギ）

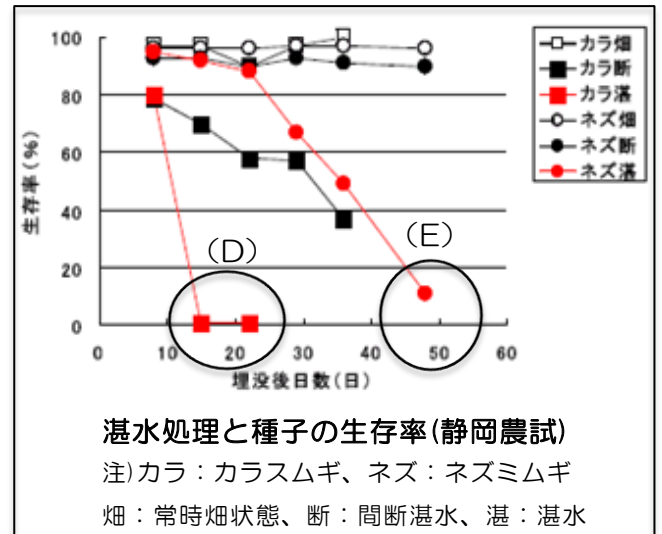
イネ科の越年生雑草。麦播種後から4月上旬まで発生が続きます。また、小麦収穫・耕起後も再生株が種子生産を行い、個体数を増やします。

カラスムギ

イネ科の越年生雑草。イタリアンライグラスと同様に4月上旬まで発生が続きます。

■防除方法

どちらも夏の湛水条件下で死滅します。特に(D)カラスムギの種子は15～20日程度の常時湛水条件下でほぼ全量が死滅しますが、(E)イタリアンライグラスの種子は比較的湛水条件に耐え、50日程度の常時湛水条件でも約10%の種子が残ります。イタリアンライグラスがまん延している連作ほ場では、以下の事例を参考に体系防除を実施し、数年かけて少しずつ種子を減らしていきましょう。



事例紹介

県内の小麦連作ほ場でイタリアンライグラス等が多発したため、天地返しと併せて体系防除を実施した結果、雑草発生量が減りました。

対策実施前



対策実施後（一年後）



実施した作業

- 7月 ボトムプラウによる天地返し
- 12月 小麦播種
除草剤（ムギレンジャー）散布
- 1月 除草剤（リベレーター）散布
- 3月 除草剤（トレファノサイド）散布

さらに対策

雑草防除に石灰窒素を使うと有効です！

石灰窒素には麦類の一年生雑草に対する農薬登録があります。耕起時に石灰窒素を施用し(F)雑草の種子を出芽させてから、除草剤（ラウンドアップ等）で一斉に枯らします。

■使用方法

- ・10月中旬 石灰窒素 50kg/10a を施用し、深さ 10 cm で耕起する。
- ・雑草発生後、ラウンドアップ等を散布する。
- ・12月上旬 小麦播種

石灰窒素に肥効があるので、基肥窒素を減らす（不用または基準量の2～3割程度とする）。

石灰窒素を施用して11月までに雑草種子を出芽させます。

